

# 「矢作川研究」No.15の発刊にあたって

豊田市矢作川研究所 所長  
柴田一美

今年も市民の皆様をはじめ多くの方々からご協力、ご支援、ご指導を頂きここに所報「矢作川研究」第15号を発刊することが出来ました。これも、ひとえに、研究所を支えていただいた研究協力者、関係機関のご助力の賜物と感謝いたしております。

本研究所も今年7月には17年目を迎え、矢作川流域をフィールドにそれぞれ専門の切り口で調査・研究を行っています。

今回の特集はカワヒバリガイです。カワヒバリガイは環境省の特定外来生物に指定されています。矢作川本流では、2002年にはすでに生息していたと推測されており、2005年には大量発生しました。矢作川流域では、このカワヒバリガイの他にも魚類のオオクチバス、ブルーギルやアメリカナマズが生息しています。そして、今一番の厄介者は水草のオオカナダモで、河川環境の悪化と漁業振興に多大な影響を及ぼしています。外来種は捕食や競争によって在来種の存在を脅かすなど、生物多様性の減少をもたらす最も重要な要因のひとつにあげられています。こうした生態的悪影響を与える外来種に対し、研究所はその除去・駆除方法や繁殖を抑えるための有効な手立ての確立をめざして、専門家の立場で漁協をはじめ河川管理者等の関係機関と共に調査・研究をおこなっています。

さて、自然や文化を守るとともに、それらを次世代へ継承できる子どもたちを育成するために矢作川学校が設立され、矢作川研究所は事務局を担っています。毎年、小中学校やコミュニティ活動の自然環境学習会、生き物観察会の講師依頼に応えたり、川のある市民生活の回復を目指して釣り大会等を開催しています。また、科学的なまなざしの楽しさ、面白さを伝えるよう中高生と大学生・大学院生との交流の場としてミニシンポジウムを開催し研究観察した事を皆さんに発表していただいています。

矢作川流域には、まだまだ豊かな自然が多く残っています。この豊かな自然の中へ飛び込んで、生物の多様性を実感し素晴らしさを感じてほしい。特に子どもたちには素足で川に入って水の音や温かみを感じてほしい。一歩一歩ゆっくり歩くと小さな生き物たちの営みが見つかります。子どもたちは、川で初めて出会う感動に目を輝かせることでしょう。そして、このような機会に出会った生き物や出来事から生まれる関心や会話が、環境や生物について考える最初の一歩になっていくに違いないと思っています。研究所もそうした活動を積極的にサポートしています。

さて最後に話は生き物とは外れますが、この矢作川の名前の由来をご存知でしょうか、古代の人達がこの地の竹で弓矢を剥いだということから名付けられたと言われています。また、今でも豊田市を含めたこの地方を「三河」と言いますが、これは「御河、又は美河」のことで、その河とは矢作川のことであります。古代では、西三河地方は「河」の国、東三河地方は「穂」の国と呼ばれていたように、西三河地方は古くから地域の人々と矢作川の関わりが深く、多くの恵みを矢作川から受けて豊かな自然と文化を育んできました。そんな歴史ある矢作川は、生き物の豊富な川とは別の興味深い川でもあります。

当研究所は地域に根ざした密着型研究所を目指しています。研究所を訪ねていただいて、どしどし活用をしてください。7名の各専門分野の研究員が皆さんの疑問や質問にお答えします。今後共、矢作川が流域住民に親しまれるよう、所員一同頑張っていきますので、皆様には、今まで以上のお力添えをよろしく願いいたします。